

焼け跡から見つかったのは全て子供の焼死体らしかった。

朝早くのけたたましいサイレンに叩き起こされて、どうにも落ち着かない一日は始まった。やじ馬根性を発揮するつもりはさらさらなく、どうせそのうち情報は向こうから歩いてきてくれるはずだからしばらくベッドに俯せてじっとしていて、二度目の眠りに落ち込んだ。再び目覚めた時にはひどい頭痛が頭蓋の中を反響していて、開いた目さえ霞んでいて、サイレンのことは綺麗さっぱり忘れてもいた。振り返る無益な一日。日は既に沈みに向かう方角にある。

ドアをノックする音に耳を澄まし呼吸を静かにし、けれども返事はしない。

「あたし。……いないの?」

聞き慣れた声だ。ナルには鍵は渡していないから、迎え入れるのなら開けてやらなくてはならない。眠って覚めたばかりの全裸で、いっそ居留守を使う方が楽かとも思ったが、咎めるかのように頭は不意に思い出す。サイレンの、意味。だとしたら。

情報が歩いてきたというわけか。エスはベッドから抜けた。裸足が踏むコンクリートは砂の感触を伝えてくる。内側の施錠を解くと、扉はずいぶんと激しく開かれた。

「ハイ。まだ寝てたの?」

赤い髪が目刺さるようだ。エスは目を擦り鼻をすすり、額に貼りついた前髪を払いのける。女はまめにエスのために金を使ってくれていた。身体を張って金を稼いで、自分に靡く素振りも見せない男に甲斐甲斐しいほど世話を焼いてくれていた。寝起きだから、首に絡む腕は拒まない。

「朝方うるさかったでしょ、この辺りも」

存外素つ気なく腕は離れてゆき、ナルはさつさと部屋の奥へと歩みを進め、今抜けたばかりのベッドから片手で器用にシーツを引きはがすと床に置いた。帰り際に持ち帰って洗って持ってきてくれるつもりでいるのだろう。またこの部屋に来る理由をつくるそのためにも。

「火事か? どこだったんだ?」

「……エノカの店で、あなたこの間仕事してなかった?」

答えの代わりにもう一つの質問。煙草に火を点けながら、ナルの目はまっすぐにエスを向いていた。言われた通りだ。返事はだから額き一つで済むこと。

「金はもらった?」

「いや。まだだ」

顔色も変えず、代わりに吐き出した煙がフィルターとなつてナルの顔を霞ませた。意識は次の言葉で完全に霞む。

「逃げたわよエノカ。店に火点けて、子供全部殺して」

俄かに呑み込めない事象を告げられてなぜ頭が冴えるか。思考停止の頭の中でどうして思考が可能になるのか。何か言いたくても声が出なかった。喉の奥に疑問の言葉は貼りついて、飲み込んだ唾と共に喉を落ちてそのままだ。

「すごい騒ぎになつてるわよ。見つかったのがみんな子供の死体で……しかもみんな手足を落とされてたから……」

猟奇殺人の趣味の悪い会話だ。エノカも知っているしあの店の子供たちも知っていた。この間買われてき

たばかりの子供がいて、手足が無事なうちに一枚、そしてあの店で暮らすための姿に変貌を遂げさせられてから一枚、彼の姿をフィルムに収めた。支払いは月末だったはずだ。今はまだ月半ば。悪いニュースが飛び込んできたものだ。

「なんだか警察の手入れがありそうだって、この頃ずいぶん焦ってたらしいの。だって、あんな子供にあんな仕事させてたし、まして手足を落としてたもの。証拠隠滅のつもりで焼いちやっただんでしょね。……さすがに気分悪いわ……」

自分の悪さに上積みして胸が悪い。つまりはまんまと踏み倒されてしまったわけだ。命があるだけ儲けものか、踏み倒して催促されないためにこんな低俗な写真屋まで巻き添えに殺して逃げる甲斐性のない男でまだよかつたかもしれない。でなければ今ごろは部屋の中で丸焼きだ。残念だが自分の死体は自分で写真には残せない。

子供の手足を奪うぐらゐのことならばこの界限では大して珍しいことでもなかった。そんなものは規制されようがされまいが名前さえ大げさに表に出したりさえしなければお咎めなししいところで、欲望の肥大した連中は互いの体臭を嗅ぎつけ合ってこの界限に集いそれぞれの表に出せない性癖をなんとか正当化しようとしている。子供を抱きたい連中もいれば畸型に魅かれる連中もいる。求める者がある限り、商売は商売として成立するのだ。子供を買い取る業者がいて、そこから上玉を買いつける娼館があつて、手足を落としてこっそり始末する医者もいて、メニュー用の写真を撮る写真屋がいた。裏にも表にも経済があるといういい事例だ。貨幣によく似た数字はここでも増減を繰り返していたのだ。

けれどもそこには堅固な信頼とやらが築かれていそうで実は脆弱極まりないという紛れもない事実がある。誰かが突然うらがえて逃げてゆく。沢山の犠牲を伴つて。

あの店には忘れてはならない子供がいた。手足と両目と、そして意志とを奪われて、客の精液を命の糧に生きる身体に造り替えられたそんな子供が。天国が地獄をどうやら追い払ってくれたらしい。少なくともあの子供にとつては焦熱は解放の入口でしかなかったはずだった。

ちよつとしたパニックが言葉を奪い去つていた。人にとつていいことだとしても自分にとつては寝耳に水の大事件だ。寝起きの全裸、ドアの前で茫然自失。ナルは存外面白いものでも眺めるような目つきで煙を吐いていた。「ずいぶん堪えちやつてるみたいね。……ウリやつてた時以来でしょ、やり逃げなんて」

「別にエノカと寝たわけじゃない」  
「似たようなものでしょ、仕事はセックス。裸で関係するか服を着て関係するか。金もらつて身売りするのは労働力を売ると、別に大差ないじゃない」

腕の辺りに寒さを覚えた。右の手の傷が疼いている。落ち着くためにそつと触れた。盛り上がった皮膚の下の血管を、今も血液は流れている。自堕落な暮らしに墜ちようが自身の死は存外遠かった。それも突然逃げた誰かのように、心構えのままでない突然に訪れるものなのかもしれないが。

寝覚めの悪いダルな日だ。ナルの側に歩み寄り、その指先からフィルターがとうに近い煙草を奪った。やけにまずいそれは頭の芯で鈍い疼きを放ち始める。眩暈に似てくらうらしていた。

「ま、仕方ないわよ今さらどうしようもないんだから。せいぜいエノカを呪い殺してあなたは違う仕事を見つめることね。酒でも飲んで忘れりゃいいわ」

やけに明るい声音だ。人の気も知らずにと視線を尖らせたエスに負けじとナルの視線もまた楽しみに研ぎ澄まされていた。そうして、紅い唇が誘ってくれる。

「日が落ちたら飲みに行きましょ。頭ん中、酒で洗うといいわ」  
まあそれなら断るいわれはない。奪い取った煙草はすぐに火が消えた。生まれてすぐに死ぬ子供みたいに。いつまでも裸でいるわけにはいかないと思った。

鏡張りの天井に何もかもは丸写しだ。秘密を一つもつくれない店の中は暗がり、僅かにテーブルの上こどもに点されるランプと客の吸う煙草の火が光源となる。L字型のソファが向かい合つて配置された一番隅のスペースにナルはエスを誘い、腰を落ち着けたところで出迎えた店の女の子をやけに親しげに呼んだ。暗いからよくわからなかった彼女がナルの隣に座る。ランプの明かりに照らされて、オレンジに見える顔はかなり若く映つた。

「久しぶりね。元気にやつてた?」

女同士の挨拶あはれとは到底思えないほど濃厚なキスの後、彼女の背中の中頃まで垂れた癖の強いブラウンの髪を梳きながら、ナルはまだ頬に小さなキスを繰り返している。

「元氣よ。ナルに会えて嬉しい。……向こうの人は、確かたまに店で会つたわね」

目はエスを捉えていた。会つた記憶がエスには朧まぼろしだ。新しい煙草をくわえながら覚えがないことを確認する。無視でもするかのように、指先はライターを弾いた。

「この子はシーナン。前にうちの店で働いてたのよ、ずいぶん短い間だったけど。あんたが店に来た時に何度か会つてるのかもね。シーナン、この人はエス——スベル・イー・エス。男にも女にも見境ないから氣をつけるのよ、悪い病氣もらわないようにね」

見境ないのはどつちだ。相手に合わせて身体を使い分けるのはナルだつて同じじゃないか。けれども口に出して言い返すつもりにはなれなかつた。今日は黙つていたかつた。なぜだか無性に。酒と煙草さえあれば後は何もいらぬ。寝る相手でさえも、だ。

「ああ、店でも売つてた本に写真が載つてる人ね、そうなの、この人があんな写真を……。なんか相通じるものがあるわね、この人も、壊れてるみたい」

嬉しいことを言つてくれる。けれども返す言葉はどこにも見当たらずにエスは鼻で笑つて煙を吐き出す。それきり、どうしようもないから沈黙は埋まらない。

頭の中だけに言葉を溢あふれさせたエスをまるで放り出すかのように、女一人は奇妙な密着を解くことをしなかつた。シーナンの肩を抱いたまま、ナルは子供をあやすかのようにしてその髪を撫で続けている。暗がりの中でさえ、シーナンの唇は淡く開き、かすかな吐息をついていた。じわじわと脊せき椎つばねに熱が落ちる感覚か。そのうち女の部分が潤み出す前兆の、貌かたち。それを眺めるのは悪いことじゃない。エスは天井を見上げる。鏡に映る女二人の戯れ、鏡像のビープショウ。

すつかり置き去りにされたエスを救うかのようにして、ボーイが注文を取りに来る。どちらが客でどちらが店の者なのか判別を容易にしないほどラフな格好の彼は二十歳に足をかけたかかけないかくらいの若さだった。黒いTシャツにジーンズ、両耳にぶら下がるループのピアス。髪をきちんと刈り込んで、とりあえずはござつぱりとして見えた。